

シンポジウム2

「がんの化学予防と補完医療」

4. 小麦ふすまによる大腸がん予防のための無作為割付臨床試験

石川 秀樹 (大阪府立成人病センター検診部消化器検診科)

食物繊維は大腸癌を予防する食品成分として一般的には認知されている。しかし、最近、食物繊維の摂取しても大腸癌を予防しないことを示唆する大腸癌予防臨床試験の成績がいくつか続けて報告され、大腸癌の発生予防における食物繊維の位置づけが再検討されてきている。私たちは、食物繊維を多く含む小麦ふすまの投与による大腸癌発生予防のための臨床試験を現在も実施中である。本学会では、これまでに報告された食物繊維と大腸癌に関する報告を紹介するとともに、私たちの臨床試験についても紹介する。

食物繊維と大腸癌の関係は、1971年にBurkittが、アフリカの人に大腸疾患が少ないのは食物繊維を多く含む食物繊維を多く摂取しているから、と考えたのが最初とされている。その後、各国の食物繊維の摂取量と大腸癌の発生率に負の相関があることがいくつも報告された。また、本邦での大腸癌の増加は食物繊維の摂取量の減少と関連づけて説明されることが多い。しかし、食物繊維の摂取量の少ない場合、おおむねエネルギーや脂肪の摂取量は多く、工業は発達し、運動量も少ないなど、食物繊維が大腸癌の発生を促進しているかどうかは、これだけでは不明である。

世界13カ所の症例対照研究のメタアナリシスによると、食物繊維の摂取は大腸癌に対し予防的であることが示された。しかし、食物繊維の由来の多くは野菜・穀類からであり、この症例対照研究の結果からは、野菜・穀類の他の成分が大腸癌を予防している可能性も否定できない。コホート研究では、1989年の報告で食物繊維の摂取は大腸癌を弱く予防する関係が示されたが、その後の代表的な報告では関連は見いだされていない。

これまでに5つの食物繊維を用いた大規模な無作為割付臨床試験が報告されている。これらの試験では、食物繊維の投与が大腸腺腫の発生を予防する可能性はほとんど示されていない。そのため、これらの試験の結果から、

- 1) 食物繊維の摂取で大腸癌の発生を予防することはできない。
- 2) 大腸癌の中間代理指標として腺腫は適切ではなかった。
- 3) 試験期間・時期が適切ではなかった。
- 4) 食物繊維の種類・投与量が適切ではなかった。
- 5) 食事調査、食事指導が適切ではなかった。
- 6) 参加者集団が適切ではなかった。

などの可能性が考えられている。

これまでの報告と私たちが実施している小麦ふすまの投与による臨床試験を紹介し、今後、このような機能を持つ食品による発癌予防のための臨床試験はどのようにあるべきなのかについて議論を行いたい。